



岐阜県可児市のトイファクトリーはキャンピングカー製造販売で近年、急成長を遂げている。1995年、藤井昭文さんが1人で立ち上げた会社は年間生産台数が800台に迫り、国内有数の規模を誇る。約30年前、1人で「第1号車」を開発した時から変わらぬ車造りの哲学があります。「見えない部分へのこだわり」です。今でこそデザイン性でも先頭を走っている自負もありますが、車内の快適さではどこにも負けない、との信念でやってきました。

バブル経済の名残もあり、創業当時はシャンデリアや色鮮やかな内装材といった車の派手さばかりを競い合う時代でした。しかし、第1号車の室内は地味なベージュ一色。その代わり、気づきにくくても、断熱性を徹底的に追究しました。

原点は幼少期の思い出です。内装業を営んでいた父は朝から深夜まで働く毎日を送っていました。しかし、たまの休みには必ず手づくりのキャンピングカーで若狭湾や遠くは北海道、九州まで連れて行ってくれました。

「第1号車」1人で開発 ■ 見えない部分にこだわる

何十回とした旅は、常に家族で車中泊です。エンジンを切った車の暑さ寒さのつらさは身に染みていました。まずは寝泊まりに困らない車。この一点に創業時は集中しました。

窓や天井など車内各部に多種多様な断熱技術を駆使し、2009年には宇宙航空研究開発機構(JAXA)のロケットに使われる特殊な断熱セラミック塗装を採用しました。テレビ番組で存在を知り、手掛ける塗料会社にすぐに直談判に行きました。

車に用いる例などなく、驚かれました。もちろんコストもかかります。「見えない部

分にそんなにカネかけてどうする」と見られたこともありましたが、得られる快適さに比べれば安いものです。「断熱のトイ」との揺るがぬ評価を確立できたことで今の会社の成長があると思っています。

創業して建てた「第1工場」は物置小屋だった。

岐阜県八百津町で「イナバ物置」を組み立て、本社を兼ねた工場を造りました。ただ、数百万円の車を売るのが知名度はゼロです。訪れたお客さんに「いい車だね。ところで会社はどこ？」と聞かれ、答えに窮したことも。当初は全く売れませんでした。「最後の賭け」とばかりに、

東京の日本最大のキャンピングカーショーに1台を出展しました。手作りの看板を置いただけのブースは、10台も車を並べる大手とは比べようもありません。来場者はほぼ素通りです。しかし、腕組みしながら1人の男性がまじまじと車を観察し始めました。

「質実剛健で、日本のマーケットを引っ張っていく車だ」とこぼした男性は、アウドドア雑誌のライターでした。断熱や就寝スペース、収納まで「使い手目線に徹している」と興味を引いていたきました。

このライターとの出会いから道が開けた。

若気の至りですが、独りぼっちの出展でも、自信しか湧きませんでした。キャンピングカーや車の旅が心底好きな人が造った車がありまじいと感じたからです。これはスタイルが違うぞと。資金や技術力で仕様には限界があっても、車内空間の一つ一つについて狙いを余すところなく説明できる自負がありました。

ライターさんが雑誌に取り上げてくれ、初めて東京で車が売れました。創業当初は「格好いい車」とはほとんど言われませんでした。乗り心地が違うと口コミでお客さんが増えていきました。創業から10年ほどでトヨタ自動車の「ハイエース」をベースにしたキャンピングカーでは販売台数が全国一になりました。(岐阜支局長 西堀卓司が担当します)



略歴 1971年岐阜県出身。89年可児工業高校を卒業。専門学校中退後、アパレル商社勤務などを経て95年、トイ

ファクトリーを創業し社長に。キャンピングカーの業界団体「日本RV協会」理事も務める。52歳。

「改造」や「旅」へのこだわりは、4人きょうだいの長男として育った幼少期から芽生えていた。

おやじの仕事の都合で、小学校までに計5回の転校を経験しましたが、いつもすぐ友達ができました。父母が侍言葉など独特の方言がある岐阜県美濃白川地域の出身で、言葉遣いをからかわれても逆手に取って笑いに変えて仲間に入っていくタイプでした。

ものづくりへの親しみも当時からです。裕福な家庭ではなく、友達が乗っていた、きらびやかなライトで飾られた



スーパーカーをイメージさせる自転車などはうちには無理だと子ども心に理解していました。そこで母にもらった「ママチャリ」を改造。自分で電飾や物入れを付けたり、車体を塗ったりして誇らしげに走る少年でした。

「放浪癖」もあったようです。小学5年の時に子どもだけで約50キロ離れた美濃白川の曾祖母宅まで自転車で旅したこともあります。

今と違って 구글マップ などありません。地図も持たず、帰省時の道の記憶を頼りに家に向かう飛騨川や支流の

経営の厳しさ、父から学ぶ ■ 専門学校中退し起業決意

白川沿いを走りました。曾祖母は心配で朝から夕方まで立って待っていたそうです。今なら考えられない旅ですが、そんな冒険も自分で決めたことなら認めてくれる、とにかく奔放主義の家庭でした。

父、昭二さんの内装業の現場を家族総出で手伝った子ども時代の体験が経営につながる貴重な財産となった。

住宅建築でも仕上げに当たる内装は、作業が進むと一気に家らしくなるんです。見守る施主が喜ぶ顔に、自分までうれしくなりました。

家長制の強い時代、父親は家では大きな存在です。そんなおやじが、年末になるとタオルやカレンターを持って頭を下げて挨拶に回る姿がありました。ビルなどの現場で

は、人のいない深夜に作業をすることも少なくありません。会社経営の醍醐味、厳しさを幼少期から肌で感じました。

恋愛結婚した母の家系は学校の校長や医者など、いわゆる「インテリ」が多く、おやじは学歴では異端でした。しかし、いつもにこにここと笑みを浮かべ、腰の低いおやじは親戚中の人気者でした。常に謙虚な姿勢など、経営者としてもおやじの背中から多くを学びました。

小学校までは成績もほどほどでしたが、中1でオール1になりました。「人と同じ」がとにかく嫌いで、とがったことがしたい気持ちが変な方向に向かったのか。校則違反をして学校もサボりがちになりました。



自転車で約50キロの旅をするなど冒険心にあふれた性格だった (前方が筆者)

しかし、遠足で他校の生徒と派手にけんかした時です。先生に「温かい家庭で育てているのに、なんでそんなことしてるんや」と言われました。ふと、自分でも何でだろう、

と。「もうやんちゃはやめませ」と言い切って猛勉強。先生も補習に根気強く付き合ってくれ、2年生の1学期にはオール5に近い成績になっていました。

進学校に進める成績でも、おやじには「自分で商売すれば頑張れば頑張るほど稼ぎがあるぞ」と言われて育ち、会社員になる気は全くありませんでした。建築デザイナーになろうと工業高校に進み、設計を勉強しました。

大事故との遭遇が創業への思わぬ契機になった。

デザイン系の専門学校に進んだのですが、高校と重複する内容が多く、正直物足りなく感じていたころです。バイクで帰宅途中、観光バスにひかれました。下半身が挟まれ、一時意識不明に。救出まで8時間かかる事故でした。

家族にもあきれられました。が、意識が戻って2、3日で転院のため一時退院すると、もう病院には行きませんでした。九死に一生を得たことを機に、学校を続けるか考えました。当時、キャンピングカーを造っていた会社でアルバイトをし、技術も教わっていました。思い切って専門学校を中退し、起業を目指すことを決めました。

(岐阜支局長 西堀卓司)

寝ずの運転手として創業資金を稼いだ。だが、業界への世間の視線はまだ冷たかった。

起業するにも営業力が足りない。と、アパレル商社で2年間勉強させてもらってスキルを磨き、ドライバークに転職しました。1500万円をため、残り300万円の融資を銀行に頼んだ時のことです。企画書に目も通してもらえず、「そんな車どこを走ってます?」と一蹴されました。

キャンピングカーへの認識はそんな時代。しかし、欧州では既に旅の友として定着



し、こんなに便利な車はないと自らの経験からも確信していました。何とか資金をため、後発の地方企業の船出は苦難もありましたが、独自の車作りが一目置かれる存在になっていきました。徐々に販売が伸び、2004年に関東進出を果たしました。

名が広まり、自動車業界からの中途入社など多くのクルマ好き、旅好きが集まる。会社の成長は人との出会いに恵まれたこと抜きに語れません。00年代、日本IBMでトップ級の成績を挙げているセールスマンが転職してくれ

強みはスピードと発想力 ■ 常にわくわくできる集団に



真摯なものづくりが認められ、メーカーとしての立場を築いていった（創業当初の藤井さん）

たこともあります。

第1号車を購入しリピーターになってくれたお客さんでした。横浜への関東初出店時など、顧客ながら相談相手になってくれたのですが、あるとき「会社辞めて手伝おうかな」と言われたのです。当時の初任給は月18万円です。「18万円しか払えませんが」と半ば冗談で返すと、「会社らしくなるところまで見届けるよ」と本当に入社が実現しました。

一回り年長のこの「新入社員」の教えが「経営者になれ」ということでした。職人肌の何でも屋でしたが、「この会社の強みは君の発想力だ」と諭され、営業を離れました。社員が寸前で受注を逃し歯がみしたこともありましたが、個々が力をつけ、会社

の底上げを実感しました。

約10年前、視察に訪れたトヨタ車体の網岡卓二社長（当時）の言葉も励みになっています。中小企業を見てみよう、という程度の訪問だったはず。それが視察が進むと「この造形はどうやったら可能なんだ」と、数十人の会社の設計や施工に網岡さんの目の色が変わりました。

「驚いた。この会社はものづくりで根本的に重要なものを持っているよ」との励ましをいただきました。その後、トヨタ自動車のディーラーからもコンセプトカーの共同開発の声がかり、販売店に車が並ぶようにもなりました。

以前、この業界は「キャンピングカー屋」と呼ばれ、業界でも協業の話ができるのは下請け企業などに限られて

いました。今は自動車メーカーが直接声をかけてきてくれます。愚直なものづくりを続けて「メーカー」の立場を確立できたと自負しています。

23年に広州モーターショーに初出展し、海外展開を本格化するとともに、中国の力を感した。

日本のモーターショーをしぐく熱気がありました。驚いたのはBYDです。仕事柄、車の細部に目がいきますが、計器盤から車内の収め方まで相当なレベルです。ある商社の方が「『メイドインジャパン』を誇りにしては世界とはもう戦えない」とこぼしていました。その通りです。

新勢力の台頭や自動運転などで自動車業界は大変革の時代を迎えます。家の機能を持つ車が当たり前のように空を飛ぶ時代も、遠くない将来に到来するとみています。

天下の企業が沈みかねない半面、当社にはチャンスだと捉えています。何万もの社員を抱える企業ともやり合う気概です。ただ、大企業と同じでは飲み込まれる。上回れるのはスピードと発想力です。

社員には常に「外の世界に目を向け感性を磨いてほしい」と伝えていきます。最近自動車メーカーの方と話をしていると「特に車が好きでない」と感じる人もいますが、それでは技術革新は生まれません。常にわくわくできる集団づくりが、最も重視している経営課題です。

（岐阜支局長 西堀卓司）

2023年、内部の仕様を救護室など用途に応じて簡単に組み替えられる車両「MARU MOBI（マルモビ）」を開発。キャンピングカー以外の製品開発にも力を注ぐ。

我々の仕事が災害時に役立つと気づいたのは東日本大震災です。宮城県の実家が全壊した社員がいました。キャンピングカーで駆けつけると、家族が避難所の代わりに寝泊まりすることができ、携帯電話などの電源としても重宝されました。

私も2カ月ほど後に支援に



赴き、「暖が取れるのがこんなにありがたいとは思わなかった」との声を多く聞きました。レジャーばかりが念頭にあった車造りの新たな可能性を知り、災害向けの車の開発を本格化しました。

普段は人や物の輸送などに使用しながら、有事に救護室や休憩室になれば車をより有効活用できる、との発想で生まれたのがマルモビです。特別な技術がなくても座席を取り外し、ベッドやテーブルを簡単に着脱できる仕様になっています。

自治体での採用が始まって

災害向け開発本格化 ■ モビリティカンパニー目指す



能登半島地震の支援に被災地へ赴いた（左から2人目）

いますが、首長らの公用車としての提案も進めていきます。マルチパーパスの車なら同じ税金でより多くのことが出来ます。もう、そろって黒塗りセダンに乗る時代は終わったのではないのでしょうか。

能登半島地震では自身もマルモビで現地入りして支援物資を届け、応援の自治体職員の宿泊場所としてキャンピングカーも提供しました。災害連携協定を結ぶ岐阜県美濃加茂市の中核医療機関の要請で提供した車も、災害派遣医療チーム（DMAT）の休憩所として活躍する。

東日本大震災以降、熊本地震などにも赴きました。被災地で耳にするのが、職員や医療従事者が極度の疲労でダウンしてしまう問題です。避難

所で横になるわけにいかない職員たちが人目をほばからず休める場にしてもらい、また最大限の力を発揮してほしいと考えています。

1月11日に能登半島地震の被災地に赴き、痛感したのはトイレの問題です。道中のサービスエリアでも断水で多くの便器が使用禁止になっていました。岐阜に戻り、急ぎよ型を起こしてトイレカーの開発に取りかかりました。

今回ばかりは「完成度は二の次で」と号令をかけ、水がなくても排せつ物を清潔にごみ処理できるスイス製トイレを2つ個室で設けた車が2日間成形になりました。石川県珠洲市の小さな集落の避難所に届け、女性用トイレとして活用してもらっています。車内を变幻自在に変えるこ

とはキャンピングカーメーカーの腕の見せどころです。近年、複数の自治体と、有事に車を提供する災害連携協定を結びました。企業ですからもちろん収益は必要ですが、こういう協力はビジネスの視点だけではできません。枠を設けず、当社の技術の応用を追求していくつもりです。

将来は「空飛ぶキャンピングカー」の開発を視野に入れる。

自動運転や空飛ぶ車の技術が進展し、車が単なる移動の手段でなく、過ごす場にもなる時、車内空間を追求してきた30年間のノウハウが生きてきます。

キャンピングカーが住宅インテリアと違うのは、走行中の振動やゆがみに常にさらされることです。動かないことが前提となっている住宅の施工をそのまま用いれば、接合部から設備が壊れてしまうといったことも起こり得ます。

燃料効率を意識した軽量化や、様々な気候への対応力、狭い空間のレイアウトにもなるのではの知恵が詰まっています。もちろん駆動技術など、異業種との連携が必要な点もあります。車社会が大変革を迎えても、しっかりと必要とされるよう、知見を蓄えています。キャンピングカーメーカーから階段を1つ上った「モビリティカンパニー」に。それが今、目指している姿です。

（岐阜支局長 西堀卓司が担当しました）